

先週の礼拝メッセージ(2021年10月10日) ベン牧師

「異邦人への福音」 エフェソの信徒への手紙 3:7-9

先週は、神の秘められた計画ということを語りました。その計画とは、救いがユダヤ人だけのものではなく、異邦人にも及び、イエスさまを信じるだけで全ての人が救われるというものでした。

今日は、パウロが自分はこの異邦人伝道に召され、遣わされているのだと語っているところです。

7節には、「神はその力を働かせてわたしに恵みを賜り」とあります。力はギリシャ語で「デュナミス」といい、ダイナマイトの語源になったものです。神の力はダイナマイトどころではない、全世界を創造し、治め、動かしておられる力です。そのパワフルな力が臨んで、パウロは福音に仕える者となった、そればかりか、エフェソ教会の一人一人にも同じ力が働いていると、パウロは書き送るのです。

聖書の中のいくつもの手紙はパウロが書きましたが、聖書自体、その著者は聖霊ご自身です。その聖霊が、パウロを用いてエフェソ教会の人々、そして今、聖書を読んでいる私たちに、神の力(デュナミス)があなたたちのうちにも働いていると言っているのです。

パウロがクリスチャンになったきっかけは、使徒9:1-9にあるとおりです。クリスチャンを捕らえるためにダマスコへの道で、天の光に照らされ、イエス様の声を聞いたのです。そして彼は、イエス様が救い主であることをはっきりと信じました。人それぞれの救いの体験は違うでしょう。しかし、そのすべての人に神の力が働いているのです。

パウロはそんな自分を、「最もつまらない者」別の訳では「最も小さい者」と呼んでいます。彼はクリスチャン迫害の先鋒者として働いていたからです。しかも、異邦人を見下していました。そんな彼がクリスチャンとなり、さらに異邦人伝道へと召されたのです。ですから自分が、最も小さい、ふさわしくない者であると自覚していたのです。しかしそれを上回る、こんな私が神から異邦人伝道に召されたのだという確信が彼にはありました。

さらに、迫害者パウロが、今は先頭に立って福音を伝えている、しかも異邦人に伝えているということは、大きな証となりました。

パウロは誰よりも聖書に通じた、リーダーシップのある人でした。しかし彼は、恵みにより今の自分になったと告白しています。恵みとは、受ける資格にない者に与えられるものです。

9節に読み進んでいきましょう。

イエス様はよみがえられ、弟子たちに「全世界に行って、全て造られたものに福音を宣べ伝えなさい」(マルコ16:15)とおっしゃいました。

神はすべての人を招いておられます。しかし、多くの人は心を閉ざしています。パウロがエフェソの町に福音を携えて行った時もそうでした。しかしパウロは、福音を大胆に語り続け、また、祈りの人でもありました。彼の行く先々で、救われる人が起こされ、教会ができ、パウロが去った後も教会は成長していきました。このことから、パウロの生き様や福音を伝える情熱を、教会の人々が受け取っていたことがわかります。

私たちの教会も、戦前、ヘフシバ宣教団によって福音の種がまかれ、戦中の弾圧を耐え、戦後に宣教のバトンが渡されて今があるのです。そこに関わった一人一人が、なぜ揺り動かされることなく、福音を伝え続けることができたか、それは、目の前にいる、救いを必要としている人々に福音を伝えるために、私は神に召されたのだという確信があったからです。それはパウロの召しと何ら変わりはありません。

神の業が進められていく、いつでもどこであっても——それは神の約束です。

私たちはどうでしょう。パウロだからできた、あるいは、あの教会だからできる、で済ませていいはずはありません。神は、私たちに、この旭キリスト教会に語っておられるのです。

そのヴィジョンを受け取り、祈っていきましょう。福音を委ねられ、先人からバトンを受け取った者として、互いの賜物を用いて証していきましょう。

